IEEJ Industry Applications Society News Letter

電気学会産業応用部門ニュースレター 2010 年 5 月号（http://www2.iee.or.jp/ver2/ias/22-newsletter/nl_2010.html）

「“Face to Face” は活性化の原点」

電気学会産業応用部門研究調査運営委員会副委員長
自動車技術委員会委員長
寺谷　達夫（トヨタ自動車）

20 世紀は「科学」「自動車」「石油」「情報化」の世紀，一口で言うと「物の豊かさ」を追求した世紀であった。そして，21 世紀に入り，世界は大きく変貌しつつある。「地球環境・エネルギー・資源問題」「新興国台頭」「人間性復権」など，「多様性」と「心の豊かさ」追求の世紀かも知れない。

自動車の歴史上，画期的な節目は，まず 1886 年の世界初ガソリン車（カール・ベンツ），1908 年の大衆量産車（T 型フォード），1997 年の量産ハイブリッド車（プリウス）そして，2009 年の「電力網にリンクする電動車両車」（プラグインハイブリッド車，電気自動車）である。クルマの歴史約 120 年（電気学会 120 年と同じ）の内，この 40 年の変革と進化は目覚しく，今や自動車業界は，「電子化」「電動化」「統合システム化」のキーワードに代表される「エレクトロニクス産業」の一翼を担っていることは，間違いない。

電気学会 D 部門に自動車技術委員会が発足して，今年がちょうど 10 周年である。発足から，堀部門長や大熊初代自動車技術委員長を始めとする大学の先生方や自動車業界，電機業界他多くの皆様方のご努力とご協力により，活力ある委員会活動となっている。あらためて感謝します。現在の自動車技術委員長の私の目から見て，「活性化の原点」を振り返ってみると，「自動車技術の変革期」も一因にはありますが，やはりなんと言っても，委員会後の懇親会で，忌憚のない本音の議論や自由闊達な実行力にあったように思う。わかり易く言うと“Face to Face”の「ノミニケーション」こそ我々の力の源泉であったのではと思ってしまう。

話は変わって，現在，私は D 部門研究運営委員会に 2 年程参画させてもらっていますが，この 2 年で大きな変化が現れている。各技術委員長の出席率向上，時には，熱気を帯びた本音の議論もでき，この”Face to Face”の「ノミニケーション」の威力は，ここでも活性化に一役かっている。

最近思うのであるが，製造業に携わる者には，大切な「3 つの目線」がある。一つは，最近 CM で話題の「こども店長」が言う所の「これから目線」と二つ目が「生産者目線」，そして三つ目が，重要な「ユーザー目線」である。この中で，「ユーザー目線」の変化と厳しさを従来にも増して，身を持って実感する次第である。

それでは，この「ユーザー目線」を磨くには，どうすれば良いのだろうか？自動車業界では，昔から「現地・現物」の実践が言われてきた。パソコンや携帯電話が発達した現代でも，「現地・現物」の持つ威力に疑問はない。現場には，そこにしかない「空気」「風」「光」「臭い」があり，現物には，その物にしかない全ての情報が詰まっているのである。ある意味，「現地・現物」は”Face to Face”に相通じる物があるように思う。

21 世紀の車は，循環型社会に生き残る移動体である。それには，「クルマの電動化とトータルエネルギーマネージメント」が避けて通れない。「移動体の本質」は以下，

Vehicles(車)＝Door to Door Mobility + Fun to Drive
Railroad(鉄道)=Public Mobility + Fun to Ride

ライフスタイルや価値観の変化は有るも，クルマが持つ「移動のフレキシビリティ」と「運転の楽しさ」は普遍である。2010 年は，PHV(プラグインハイブリッド車)，EV（電気自動車）普及の年である。行動範囲に応じて，「クルマを賢く使う時代」の到来でもある。電気学会および，部門横断の叡智の結集が求められている。

“Face to Face”は組織活性化の原点と位置付け，D 部門の更なる発展を期待します。